狼に育てられた子？

友松諦道

手もとの『世界教育事典』（平塚益徳編）を開くとアーノルド・ゲゼルについて次のように書いてある。「Arnold, L. Gesell (1880—1961) 米国の児童心理学者。乳幼児の発達に関して長年にわたり研究し、乳幼児児童の発達・教育に関する著述や論文が多い。『狼にそだてられた娘』（一九四〇年）は特に有名である」。

ゲゼルの乳幼児の発達をとらえた著作は現場の私共には大へんに勉強になる。特に「学童の心理学」（周郷博訳・新教育社・昭和二九年）などの諸研究は指導上の指針として随分と参考にさせて貰ってきた。従って邦訳『狼にそだてられた子』（生月雅子訳・家政教育社・昭和四二年・原文 Wolf Child and Human Child, Harper & Brothers, 1941）も発売と同時にすぐに読んだ。私の記憶では旧版の刊行はも少し先だったと思うが現在手もとにないので現行版で紹介する。

本書は数奇な運命を背負った少女の痛ましい記録として読者に少なからぬ衝撃を與えた。私も感動をもって読んだ一人である。現在版のそでにはおそらく当時の書評であろう、朝日新聞のものが載っている。

「彼女は生まれて間もなくオオカミにさらわれ、母オオカミとともに実に七年間をホラ穴の中で過ごした後、シング牧師によって人間世界に引きもどされたのである。この本は数奇な少女カマラの一生を牧師の日記を資料に、ゲゼル博士が科学的なメスをふるってま

とめたもの。類書がほとんどないという貴重なもので、必読に値しよう」

本書の中でも著者は記録を入手した次第を序の中で次のように記している。

「今から十二年ばかり前、狼にそだてられていた二人の子どもが、インドでつかまえられたという報告をうけた。一九二七年に私はその子どもたちの保護者であるシング牧師に問いあわせの手紙をだした。牧師からの返事によって、さきの報告がたしかな事実にもとづいたものであるという印象が裏づけられた。(更に)牧師がこの二人の子どもを、くわしく観察した日記を持っていると知ったときわれわれはこおどりした。デンバー大学のR・ジング教授の好意によって、われわれはこの日記の原本を調べることを許された。日記を読んで、私はそのおどろくべき人間記録に感動した。そこには、狼にそだてられた子の日常生活が写真入りで説明してあり、ありのままの姿が正直に描かれているのがよくわかった……」

そしてゲゼルは、この衝撃的な事件を「実にやむにやまれない気持で」学術的というより、いささか感情をこめたうたいあげる調子で本書にまとめたのだ。本文は次のような言葉で始まっている。「人間の子どものことを書いた数多い物語のなかでも、カマラの一生ほどわれわれの心をひきつける不思議な話はない。これ以上にあやしく信じがたい話がでてくるものといえば神話だけである」

私の受けた感動もその後ながい間残っていた。遺伝と環境・文化について考える場合、この事件はいつも心の片隅からはなれなかった。このゲゼルの翻訳と同じ課題で実際にカマラとアマラを養育したシング牧師の日記が刊行されているのを知ったのはごく二、三年前のことだ。私は店頭でそれを見、小一日かけて一気に読みおえた。

シング著「狼に育てられた子」(中野善達・清水知子訳・福村出版・昭和五二年・原文 J. Singh and R. Zingg: Wolf-Children and Feral Man. Harper & Brothers. 1942 のうち第一部 The Wolf-Children of Midnapore) は、さすがに直接牧師の日記だけにゲゼルの場合とは違った意味での迫真力があった。特に本書の冒頭には地元地方判事の事実を証明する「宣誓供

述書」、牧師の上級主教によるカマラに何度か接しての体験をふまえての前書、学術的裏づけのよき協力者ジング教授の日記の信憑性を確実にするための広範な説明などが付されており、ショッキングな事件だけに、この時代の記録にはなるほどこれだけの証明が必要だったのかと教えられることがあった。

日誌によると、伝道旅行の途次、牧師はミドナプールとモーバニの境にあるゴダムリ村で、インドの原住民コーラ族の牛小屋に泊ることになった。ここで、化け物の話を聞き、その実態を確認する。一九二〇年（大正九年）十月一七日、牧師からジャングル内の目指す白アリ塚をシャベルと鋤で二、三回掘ると狼が一匹あわてて出てきてジャングルの中へ逃げこんだ。すぐに二番目の狼が驚いて必死の様子で現れ、はじめの狼の跡をたどって逃げる。もう一匹が現われた。それは地面の上を稲妻のように突進し掘っている男たちを襲った(略)。その狼はその場を少しも動こうとしなかった。母親狼にちがいない(略)。なんと恐ろしい光景だったろう。母親狼を殺してしまうと、後は簡単だった。入口を掘り出すと(略)ヤカンの底のような形をした穴で、糞や他の汚れの痕跡は全くなく、狼特有の独特な臭いのなかに、二匹の子ども狼ともう二匹の恐しい生き物とがまるでモンキー・ボールのように、しっかりとからみあっているだけだった……。

これがカマラとアマラの救出だった。発見された時、彼らは人間の音声をもっていなかった。真夜中に吠え、四つ足で素速く走る。獣の飲み方で水を飲み、生肉を喰らう。——アマラは翌年の九月二一日に死んだ。それから八年、カマラは四十ほどの語を口にできるようになり、走ることはできなかったが二本の足で歩いた。そして一九二九年（昭和四年）病床で、注射をしてくれた医師の名を間違えずに口にし呼んだという。十一月一四日永眠、死亡証明書には尿毒症によるものとあった。

シング牧師はその章の終りに、「こうして、私たちの孤児院の一つの生命が然えつき、彼女についての私の研究も終結をみた」と記している。

福村出版からは次の年、野生児の記録6として「野生児と自閉症児——狼っ子たちを追って」（ベッテルハイム他著・中野善達編訳・昭和五三年）が出版され

た。カマラとアマラの記録に対する批判的な内容をもった論文が多く集録されている。なかでもオグバーンとボース共著の「カマラとアマラの話の真実性――現地調査報告」(W. Ogburn and N. Bose: On The trail of the Wolf-Children, Genetio Psychology Monographs, 1959, 1960) は大部の論文で、時間的順序を追い、会話もそのまま載せるなど、疑問点に次第にせまっていく気迫がなんともすさまじい。

問題は、狼に育てられたという話自体の科学的真実性の追求である。オグバーンは米国フロリダ州立大学社会学研究室、ボースは印度カルカッタ大学人類学研究室に籍をおいており、他に数名の専門学者が協力して、現地で故シング牧師の子女をはじめ、医師、当時の孤児院在籍者、教会関係、行政官等々シラミつぶしに歩いていく。すでに故人になっている者も多く、金ほしさに虚言をはく者もあり、調査は難航するが最終の結着点であり、事件としては出発点にあたるゴダムリ村は遂に発見できなかった。シング牧師のよき理解者として学術的裏づけに努力をされたR・ジング教授からは次のような返信がとどいた。「残念ながら私は、牧師が書いておられること以外、ジャングル地帯のゴダムリ村については何も知りません。私は第二次大戦のため、こうした調査をする機会がありませんでした。あなたのなさっておられる調査を高く評価します。」

シング牧師は何らかの理由で発見の場所を架空の名にしたのかもしれなかった。だがもし子どもらが狼に育てられたのではないなら、パーソナリティを研究する動機そのものが殆んどなくなってしまうことになる。

一九七五年、英人による更に徹底した現地調査が行なわれ、現在その邦訳も進められているというからその解明も近い。いささかサスペンスにみちた運びとなったが、この機会に上記図書数冊をお読みになることをお奨めしたい。

(神田寺幼稚園)